

民進

Minshin Press (民主改題)

号外 静岡3区版
平成28年5月号

民進党 民進プレス編集部
〒100-0014
東京都千代田区永田町1-11-1
電話 03-3595-9988(代表)
メール press@dpj.or.jp
URL https://www.minshin.jp

明日の日本 生活が第一

～ 協同・連帯 共生・安心 ～

衆議院議員 民進党静岡県第3区総支部長



小山のぶひろ

氏に訊く

「現場からの保守」

「保守」には様々な定義があり、人によってその定義は異なります。ある人は伝統・文化を守ることに認識し、ある人は市場原理や競争原理を政府の介入から守ることを保守(この場合は自由保守主義と言われる場合があるようです)と認識します。また、共産主義諸国では共産主義体制を保持する人が「保守派」と言われます(かつてペレストロイカの際にそれに反対するリガチヨフさんが保守派と言われました)。

衆議院の大島理森議長は「土着の保守とイデオロギーの保守がある」と分類していましたが、言い得て妙だと思えます。土着の保守・現場からの保守の姿勢とは、理論的理屈や主義にとらわれることなく、現場にとって最も適合する政策を行うおとす姿勢(その際に伝統や文化といったものも考慮して生かす)であり、現行制度の良い部分も評価することではないかと思えます。

現在の安倍政権の姿勢は、少なくとも、土着の保守・現場からの保守の姿勢とはいえないのではないのでしょうか。昨年の農協法の制度変更の際には、全国監査機構の廃止と監査法人化という、「形式」を変えることで問題がすべて解決されるように認識しておりました。集团的自衛権についての議論や派遣法改悪についての議論でも同様の姿勢が見られました。現行制度がうまく機能しているのに理論や理屈に合わないから変えてしまおう、あるいは、変化を求める人たちにアピールしたいがために「変えること自体が目的」となっ

ているくらいがあるのではないのでしょうか。これはまさに、「イデオロギーの保守」であり、現実を理屈に合わせていこうとする「国粋をイデオロギーとした革新」とでもいえるべきものではないかと思えます。

何を「保守」すべきなのか。私は七十年間の平和と経済的繁栄を築いてきた、戦後の価値や現在でも機能している仕組みこそ、再評価し、「保守」すべきではないかと考えています。戦後の歩みを全否定し、「戦後を変えること」自体を目的とするのではなく、むしろうまく機能してきたものについては評価したうえで、時代に合わない部分については修正をしていくという姿勢こそ求められていると思えます。そのような「改革」「修正」の姿勢こそ、エドモンドバーク以来の、本来の「保守」の政治姿勢ではないかと思えますが、私はこれを「現場からの保守」の姿勢と申し上げたいと思えます。そして、今、まさにこの「現場からの保守」の姿勢に基づき、人口減少やマーケットの縮小、財政再建といった問題に、正直かつ着実に向き合っていくべきであると思えます。

※今回のプレス民進のテーマの「現場からの保守」の内容については、静岡新聞の四月四日のコラム記事にも掲載されております。

衆議院議員

小山展弘